題53回日本大学サッカー選手権大会　決勝トーナメント　準々決勝

駒澤大学2－0桃山学院大学

決勝点を決めた赤嶺(中)。「原となんとかして点をとろうと話していた」とその言葉通り結果を出した
（撮影・野澤俊介）

安定した守り
西の雄・桃学大に完封勝利！

隙を突き隙を突かせず

夏の総理大臣杯決勝の再戦が早くも訪れた。「夏とはチームが変わってくるのは当たり前」と**原**が語ったように、桃学大はリベンジを果たすべく前半から攻めてくるようには考えられた。

試合が始まってみると風上だったこともあり、8分の**原**のシュートを皮切りに駒大が攻勢にペースを握る。この日の駒大はセカンドボールを拾い、そこからサイドに展開。という理想通りのサッカーをしていた。先制点は28分、スローインからボールを受けた**小林亮**がクロス。ファーポストで待ち受けていた**赤嶺**が頭で折り返し、**宮崎**が身体を投げ出してゴールに押し込んだ。直後の29分に速攻からピンチを招くもシュートが枠を外れ、難を逃れる。その後は駒大が優勢に試合を進めるが、桃学大のDFも粘りをみせ1－0で前半を終える。

後半に入ると前半とは打って変わって攻守が逆転してしまう。しかし、駒大のDF陣は慌てることはなかった。「冷静に相手も見えていたので自分的には焦りはなかった。ただ自滅するのが恐かった」と**廣井**が振り返るように、集中力を切らすと失点してしまうような猛攻を桃学大が仕掛けてきた。66分、**姜**にゴール正面のスペースを突破され、シュートを放たれるもコーナーキックに逃れる。そのコーナーからも相手選手に飛び込まれるがゴール右へと外れる。82分には**重光**のクロスから**江添**にヘディングシュートを許すもGK**太**の腕の中にボールが収まり、この試合1番のピンチを耐え抜いた。駒大は、87分に**中後**からのミドルパスを中央で受けた**赤嶺**が相手DFを一気に振り切り、ゴール左隅に見事にボールを突き刺した。このゴールが試合を決定付け、桃学大を退ける。

太が「点も入れられる気がしなかったし、やってくれるっていう期待感もあったのでみんなが頼もしくみえた」と試合を振り返るように、チーム全体が自信を持っている。次は昨季のインカレから勝っていない、と相性の良くない筑波大だが、そんな不安も今の選手たちには関係のないことだろう。今の選手の考えるものは『優勝』の二文字だけなのだから。

（川崎篤彦）